

令和 6 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

『みんなの夢をつばさにたくし』 「信頼」・「挑戦」・「継続」をキーワードに心の通う教育活動を展開し、社会で活躍する総合的な「人間力」の育成をめざす。 1. 互いに信頼で結ばれた関係を作り上げ、相手を思いやる豊かな心の育成をめざす。 2. 専門コース・系の特色を生かし、挑戦する心と積極的な行動力の育成をめざす。 3. 自らの可能性を伸ばし、夢の実現に向けた粘り強い継続力の育成をめざす。

2 中期的目標

1 相手を思いやる豊かな心の育成 (1) 「心を鍛えるつばさチャレンジ」の一環としてコミュニケーション力を高める。 ア. 教育相談体制の充実とカウンセリングの手法を用いた対話主体の生徒支援をおこなう。 イ. 開発的カウンセリングの視点で生徒と向き合い、教育相談をおこなう。 ウ. ユニバーサルデザインの授業等でのプレゼンテーション活動を通して生徒の自己発信力を高める。 ※学校教育自己診断のアンケート（教員）「教育相談体制が整備」の肯定率を R 8 年度まで 80%以上をめざす。（R 3 年度 77% R 4 年度 77% R 5 年度 86%） ☆△「心を鍛えるつばさチャレンジ」 心を鍛えて社会で活躍できる人材育成を目的とした、令和 2 年度に掲げたプロジェクト。 「多様な体験による自己肯定感の向上」「コミュニケーション力を鍛え他者との信頼関係を構築」「社会にでも折れない心と努力できる力を獲得」 (2) 規範意識と帰属意識を育成する。 ア. よりよく社会で生きるために必要な力の育成として、教員全体が協力して一人ひとりを大切にする丁寧な生徒指導をめざす。 イ. 学校が安心できる居場所づくりとなるように SNS 等の適切な使い方を教えるとともに複数回の面談を通して学校生活への定着をすすめる。 ※生徒向け学校教育自己診断の「学校へ行くのが楽しい」の項目の肯定率を R 8 年度までに 85%以上をめざす。（R 3 年度 80% R 4 年度 76% R 5 年度 76%）。 ※学校教育自己診断（生徒）「悩みや相談に親身に応じてくれる」を R 8 年度までに 85%以上をめざす。（R 3 年度 80% R 4 年度 76% R 5 年度 79%） ※担任、進路指導担当による生徒面談複数回実施（100%） (3) 部活動の活性化を図る。 ア 継続的な入部促進と退部率の抑制により、帰属意識を高める。 イ 地域との交流を通して自己有用感の向上を促す。 ※1 年生の部活動加入率を R 8 年度までに 65%をめざし、年度内退部率 5 %未満を維持する。（加入率 R 3 年度 54% R 4 年度 47% R 5 年度 60%） (4) ユネスコスクールの活動を基盤に、社会参画意識の育成を図る。 ア 社会貢献活動をとおして自尊感情・自己有用感の向上を図る。 イ 地元小中学校や地域社会と連携し、地域活動や異校種との交流を通じて社会に貢献する活動を推進する。 ※小学校、中学校や地域の行事等（年間 10 回以上）、学習活動等に参加する機会の設定（年間 15 回以上） (5) 共生推進教室の取組みを生かした人権教育をすすめ、生徒のノーマライゼーションの意識の向上を図る。 ア. 「ともに学びともに育つ」の理念のもと、共生推進教室の生徒が他の生徒や地域の人々と交流する機会をより多く設定する。 イ. 障がい者理解、同和問題、セクシュアル・ハラスメント等の人権ホームルームを通して人権意識を高める。 ※R 8 年度まで、共生推進の生徒の進路決定率 100%を維持する。
2 進路実現をはかる学力の育成（挑戦する心と積極的行動の育成） (1) 「心を鍛えるつばさチャレンジ」の一環として、継続した創意工夫の授業改革に取り組む。 ア. 1 人 1 台端末を活用した、「わかる授業」「魅力ある授業」を創出する。 イ. 相互の授業見学や研究授業、授業改善の研修を通じて積極的に授業改善を図る。 ※学校教育自己診断「授業はわかりやすい」の項目の肯定率を 75%以上維持し、R 8 年度には 80%以上にする。（R 3 年度 76% R 4 年度 73% R 5 年度 78%） (2) 「確かな学力」の定着から進路実現できる学力の育成をはかる。 ア. 学力生活実態調査を年 2 回実施し、学力の定着度を測定するとともに、学力向上プラン策定の資料とする。 イ. 生徒の学力の分析を行い、生徒が進路へ積極的に取り組むモチベーションを高めるためにデータに基づいた取組みをおこなう。 ※平成 29 年度から導入した学力生活実態調査の A・B 1 ゾーンの生徒数を、R 8 年度まで 25 人以上維持。 ※進路先に対する満足度アンケートをおこない、毎年肯定的回答 90%以上を維持する。 ※中堅私大の合格者を R 8 年度までに 10 人以上めざす。（R 3 年度 8 人 R 4 年度 9 人 R 5 年度 6 人） (3) 多様な進路ニーズに応えるため専門コースや看護・医療系、総合系の授業を充実させる。 ア. 高大連携により大学での学びの先行実施を行い、人文ステップアップコースの進学に対する生徒のモチベーションアップを図る。 イ. 専門コース（社会文化コミュニケーションコースや美術工芸表現コース）の特色を生かした取組みを行う。 ウ. 外部連携による看護・医療系、総合系の授業を充実させ、進学に対する生徒のモチベーションアップを図る。
3 校内組織の業務改善と後継者の育成。（組織力の強化と改革意識の継続） (1) チーム学校として機能する体制整備 ア. 大職員室でのコミュニケーションを活性化し PDCA サイクルに基づいた業務改善をおこなう。 イ. 首席を中心に分掌横断的な連携を図る。 ウ. 全教職員が各コース・系に所属し後継者を育成することで、コース授業の充実と併せて継続と定着を図る。 (2) 人材育成と意識改革 ア. ミドルリーダーを中心に、経験年数の少ない教員の 0JT を図るなど、チームとして機能する職場づくりを推進する。 イ. 教職員一人ひとりの意識改革を図り、可能なものは外部委託を行い、勤務時間の管理や健康管理を徹底し「働き方改革」に取り組む。 ウ. 教員研修を活発に行い、より良い学校づくりに向けた意識向上に取り組む。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [令和 6 年 12 月実施分]	学校運営協議会からの意見
全体的には前年度と大きく変化はないが、授業についてはプラス評価ポイントに転じている。生徒からは「教え方に工夫している先生が多い」83%（-1 p）「視聴覚機器や PC を使う機会がよくある」89%（± 0 p）教員からは「PC 等の ICT 機器が、授業などで活用されている」97%（-3 p）などの項目が微減しているが高い数値を維持することができている。「教員の間で授業方法等について検討する機会を積極的に持っている」81%（+25p）については、	第 1 回（令和 6 年 7 月 1 日実施） 生徒が創立時より大きく変容しています。挨拶や言葉がけが適切にできています。これは地域貢献活動にも生きることだと思います。地域のお祭りやイベントで大いに活動してもらっています。生きる力があり、どんなことでもできる子が多いと感じます。もっともっとレベルアップした生徒たちの姿に期待をしています。

府立北摂つばさ高等学校

ICT 機器の活用に合わせて授業改善に資する教員研修を積極的に実施したことが起因している。「勉強方法が身に付いた。」(生徒) 71% (+ 2 P) は、教科担当者や学年が実施した講習や課題提出支援、学習支援サービスの活用等の個別指導の成果と言える。引き続き、1人1台端末の活用を促進して、学習習慣の高い定着を図る。また、安心な学校づくりとして生徒からは「先生は生徒のプライバシーなどを守ってくれる」85% (- 2 p) は微減しているものの、「学校に行くのが楽しい」78% (+ 2 p)、「悩みや相談に親身になって応じてくれる先生が多い」82% (+ 3 p) は、昨年度よりも増加しており、自己肯定感、自己有用感のさらなる向上につながる自身の取組みについて自覚ができています。保護者においては「学校はいじめや暴力のない学校づくりに取り組んでいる」86% (+11p) と前年度より大きく増加しており、学校の取組みについて HP や SNS、校長ブログ等を活用した積極的な発信と同時に、家庭との継続的な連携が高い評価につながっていると判断する。さらに、「PTA 活動に参加できる機会がある」84% (+ 8 p) と増加しており、保護者が参加しやすい活動形態を常に模索し継続を図る。	第2回 (令和6年11月8日実施) 生徒の活動をもっと対外的にしていき英語に興味を持たせるのはどうか。 現在、北摂つばさ高校が国際交流事業として取り組んでいるタイのパハルタイ高校との交流を中心にして、英語が話せる学校、英語が話せる生徒の輩出は学校の特色として大いに生かせるのではないでしか。 第3回 (令和7年2月7日実施) 小中学校では学校図書館のモデル事業があり、教員配置や図書室の活用が盛んにおこなわれている。国語力向上のため図書館資料を活用した授業実践や、調べ学習に多く利用する機会がある。特に本を購入することのできない生徒でも、書籍に触れる機会を多く作ることができる。タブレット端末の活用と並行して、インターネットと書籍の情報比較の検討などが重要である。 中学校では、1年ごとの中退率よりも3年間での卒業率を重視している。卒業率の維持向上は地域の中学校にとっても安心材料となり、学校の魅力の一つになる。
--	---

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標[R5年度値]	自己評価
相手の思いや心を豊かな人間性の形成	(1)社会に通用するコミュニケーション力のある人材を育成 ア 教育相談体制の充実	(1) ア ・教育相談支援委員会を中心として教育相談体制の充実とカウンセリング的な手法を用いた、対話を中心とした生徒対応ができるように教職員の意識と行動の変容を促す。 ・日々の授業をはじめとした教育活動全般で、生徒との対話を大切にし、信頼関係の構築を図る。	(1) ア ・学校教育自己診断(教員)で「教育相談体制が整備」の肯定率80%以上を維持。[86%] ・同(教員)カウンセリングマインドを取り入れた生徒指導を行っている」の肯定率75%以上を維持。[75%] ・同(教員)「教職員は生徒の意見をよく聞いている」の肯定率85%以上を維持。[88%] ・同(生徒)「先生は生徒の意見を聞いてくれる」の肯定率80%以上を維持。[82%]	(1) ア ・学校教育自己診断(教員)で「教育相談体制が整備」の肯定率87%(+1p)。(○) ・同(教員)「この学校ではカウンセリングマインドを取り入れた生徒指導を行っている」71%(-4p)(△) ・同(教員)「教職員は生徒の意見をよく聞いている」85%(-3p)(○) ・同(生徒)「先生は生徒の意見を聞いてくれる」80%(-2p)(○) 一人ひとりの生徒が抱えている多様な課題と向き合うことで、充実した体制の構築ができており、個々の生徒の課題解決にもつながっている。生徒たちの学校生活をより安心安全なものとするためには、一人当たりの相談回数や対応時間を増やすことが今後の課題であると考えてる。
	イ コミュニケーション力の育成	イ ・開発的カウンセリングの視点からの生徒の自己肯定感を育成するために SC、SSW および地域と連携した諸活動を通して双方向のコミュニケーション力の育成を図る。	イ ・同(生徒)「学校に行くのが楽しい。」肯定率80%以上をめざす。[76%]	イ ・学校教育自己診断(生徒)「学校に行くのが楽しい」78%(+2p)(△) 心身の不調や友人間でのトラブル等が要因の一つと考えられる。生徒の自己肯定感を向上させることを目標に教育相談コーディネータを中心に相談活動に取り組んだ。肯定率は80%に届いていないが、SC、SSW の活用回数は昨年度より増え、心理面と福祉面での指導助言をいただくことで充実した生徒支援により一層つながることができた目標に達していると判断する。
	ウ 自己発信力向上	ウ ・ユニバーサルデザイン授業等で生徒がプレゼンテーション等の体験活動を通して自己発信力の向上をめざす。	ウ ・同(生徒)「授業を通して自信がついた。」肯定率70%以上を維持。[72%]	ウ ・同(生徒)「授業を通して自信がついた」72%(±0p)(○) 生徒の自己発信力を高めるため、社会文化コミュニケーションコースの授業や情報の授業をはじめ様々な授業でプレゼンテーション能力の向上を図った。
	(2)規範意識と帰属意識の育成 ア 生活指導の充実	(2) ア ・生活習慣の確立を促し遅刻者数の減少をめざす。状況に応じて保護者面談を含めた家庭とのより緊密な連携体制をとり基本的な生活習慣の確立に重点をおく。	(2) ア ・前年度比で遅刻者数、欠席者数ともに3%減少(遅刻者数 6,215 人、欠席者数 5,726 人)をめざす【遅刻者数 6,408 人、欠席者数 5,904 人】	(2) ア ・今年度の遅刻者数は8,445人、欠席者数は6,237人である。昨年度より遅刻者数が2,037人増加、欠席者数は333人増加した。(△) 生徒への心のケアのため傾聴を重視して関係性を大切にした生徒指導を継続している。さらには、規則正しい生活習慣を確立するよう生活面での指導にも力を入れてきたが、現状として欠席者、遅刻者がともに増加している。とりわけ、遅刻者数は昨年度より大きく増加することになった。生活面だけではなく心身の不調による欠席、遅刻が増えているため、引き続き、教育相談支援委員会と連携したより一層の生徒支援を継続していくことが重要である。
	イ 相談体制の充実による安心できる居場所づくり	イ ・安心して学校生活を送るため SNS 等の適切な使い方を学び良好な人間関係を構築できるようにするとともに、きめ細かな面談の実施(2回以上/年間)。	イ ・学校教育自己診断(生徒)で「悩みや相談に親身に応じてくれる先生が多い。」80%をめざす。[79%] ・同(生徒)「先生はプライバシーや知られたくない秘密を守ってくれる。」80%以上を維持。[87%] ・SNS 関係の LHR の実施[2回/年]	イ ・学校教育自己診断(生徒)「悩みや相談に親身に応じてくれる先生が多い」82%(+3p)(○) 保健室、教育相談、担任等で生徒の悩みや相談に対して丁寧な対応を行っている。しかし、悩み等を抱えている生徒の増加に対し教員の対応が十分に追いつかないのが現状と言える。 ・同(生徒)「先生はプライバシーや知られたくない秘密を守ってくれる」85%(-2p)(◎) ・SNS 関係の LHR は年2回終了。(○)
	(3)部活動の活性化 ア 部活動を通した自己有用感の向上	(3) ア ・継続的な生徒の入部促進と多様な場面での活動を促す。帰属意識を高め自己有用感の向上を図る。	(3) ア ・1年生の部活動の入部率55%以上を維持し、年度内の退部率を5%以内とする。[入部率60%、退部率4.1%]	(3) ア ・1年生の部活動の入部率は年度当初(4月)が46.0%。入部率のさらなる向上・維持をめざして部活動の活性化につながる「燃えろクラブウィーク」などに取り組んだが、11月調査での入部率は42.0%となり減少に転じた。年度内退部率は8.8%(△) 次年度も引き続き、入部率促進に向けた取組み(生徒会執行部と部活代表者会議との共催で部活動集会や入部勧誘放送、ポスター掲示、HP 上で定期的な部活動情報の発信など)を行い、学校の特色としての部活動を活性化するとともに、居場所としてのクラブへの定着を進めていきたい。

府立北摂つばさ高等学校

	(4) 社会への参画意識の育成 (5) 共生推進教室の取組みを生かした人権教育をすすめる生徒のノーマライゼーションの意識の向上を図る	(4) ア - 震災復興支援活動をはじめとする地元小中学校や地域社会と連携した社会貢献活動を推進する。 イ - 小中学校の学習活動への参加を推進する。 (5) ア - 共生推進教室の生徒と普通科の生徒との協働活動の場面を設定する。 イ - 障がい者理解、同和問題、セクシュアルハラスメント等の人権ホームルームを通して人権意識を高める。 ウ - とりかい高等支援学校と連携して実習先、進路先を確保。就労への丁寧な意識づけと支援をおこなう。	(4) ア - 小中学校、自治会、地域社会と連携した社会貢献活動の機会を年 10 回以上設定する。〔 9 回〕 イ - 小中学校の学習活動（出前授業等）への参加を年 15 回以上設定する。 (5) ア - 共生推進教室設置校対象のアンケート等で第 3 学年の生徒の協働活動満足度 75%をめざす。〔R4 73%〕 イ - 学校教育自己診断（教員）「障がい者理解を深めノーマライゼーションの理念に基づく社会を築く資質を養うことができるように工夫している」80%以上を維持。〔79%〕 - 同（生徒）「人権について学ぶ機会がある」90%以上を維持。〔93%〕 ウ 3 年生全員の進路実現 100%〔100%〕	(4) ア - 今年度は茨木市と小学校との連携として、玉島小学校学童保育の体験実習を行うことができた。地域行事についてもこれまで以上に積極的に参画した。南中学校区フェスタ 2024、玉島まつり、水尾まつりに加え大池フェスティバルにも参加し、ダンス部、書道部、ユネスコ部、社会文化コミュニケーションコースの生徒たちがそれぞれのイベントを盛り上げることができた。かつ震災復興支援募金活動を 6 回実施することができた。(10 回) (◎) イ - 今年度の小中学校の学習活動（出前授業等）への参加は 4 回であった。回数は少ないが、美術や体育、進路生活などの出前授業を通して本校の授業や高校生活について丁寧に説明することができた。次年度も小中学校の学習活動への参加を推し進め、児童生徒の成長や課題解決に努めていきたい。(△) (5) ア - 共生推進教室設置校対象のアンケート等で第 3 学年の生徒の協働活動満足度については、次年度の 5 月以降に教育庁より集計結果の通知予定。(R5 67%) (△) イ - 学校教育自己診断（教員）「障がい者理解を深めノーマライゼーションの理念に基づく社会を築く資質を養うことができるように工夫している」89% (+10p) (◎) - 同（生徒）「人権について学ぶ機会がある」93% (± 0p) (◎) ウ 3 年生全員の進路実現 100% (○)
進路実現をはかる学力の育成 （挑戦する心と積極的行動の育成）	(1) 「わかる授業」をめざし創意工夫の授業改革に取り組む ア「学びを自信に」つなげる授業改革 イ 校種を超えた授業公開・研究授業 (2) 「確かな学力」の定着から進路実現できる学力の育成を図る ア 学力生活実態調査の導入実施 イ 生徒が進路実現へ積極的に取り組むモチベーションを高める取組み	(1) ア - コース授業改善委員会を核に学習指導要領の主旨を踏まえ、「わかる」から「自ら考える」ことで「学びを自信に」つなげる ICT 機器の利活用を通して、生徒が積極的に参加できるように授業改善をおこなう。 - 生徒からのアウトプットの能力を育成するため ICT 機器を活用した授業を進める。 イ - 小中学校の公開授業や研究授業を複数教科で開催。 (2) ア - 学力生活実態調査（4 月と 10 月実施）をツールにして学力定着度を測定・分析。進路目標実現に向けキャリアパスポート等で具体的な支援を実施。 イ - 学習支援クラウドサービス等の活用で家庭学習の定着を支援。 ・講習や端末を活用した双方向の活動等により主体的な学びへつながる自学自習の習慣を習得させる。 ・2 年次以降人文ステップアップコースにより進学希望の生徒のモチベーションアップを図る。 ・昼休みの図書室の開室と併せ図書委員会活動を活性化さる。「読書キャンペーン」を通じて多くの蔵書貸し出しを行い、読書活動の活性化を図る。	(1) ア - 学校教育自己診断（生徒）「授業は分かりやすい。」肯定率 75%以上を維持。〔78%〕 - 同（生徒）「教え方に工夫している先生が多い」肯定率 80 以上を維持。〔84%〕 - 同（教員）「視聴覚機器や PC を使う機会がよくある」肯定率 85%以上をめざす。〔89%〕 ・同（教員）「コンピュータ等の ICT 機器が、授業などで活用されている。」肯定率を 85%以上をめざす。〔100%〕 イ - 異校種連携で研究協議 1 回以上設定。〔 1 回〕 (2) ア - 学力生活実態調査の上位者（A・B 1 ゾーン）25 人以上を維持。〔37 人〕 - 進路実現に対する満足度の肯定率 90%維持。〔92. 5%〕 イ - 学習支援クラウドサービスの活用により学校教育自己診断（生徒）「家庭学習が習慣となった。」肯定率 55%をめざす。【新規】 ・同「勉強方法が身についた。」肯定率 75%をめざす。〔69%〕 ・中堅私大の合格者 10 人以上をめざす。〔 6 人〕 看護医療系合格者 15 人以上を維持。〔17 人〕 ・学校教育自己診断（教員）「学校として読書指導に積極的に取り組んでいる。」肯定率 50%以上を維持。〔51%〕 ・「この学校は図書室が生徒に活用されている。」肯定率 50%以上をめざす。〔45%〕	(1) ア - 学校教育自己診断（生徒）「授業はわかりやすい」肯定率 77% (−1 p) (○) - 同（生徒）「教え方に工夫している先生が多い」83% (−1 p) (○) - 同（教員）「視聴覚機器や PC を使う機会がよくある」89% (± 0p) (○) 昨年度と同様の高水準を維持することができた。相互授業見学の活用と研究協議等については企画部が中心となって積極的に行き、授業担当者の「わかる授業」作りの取り組みを一層進めることができ、生徒が主体的に授業へ参加できる仕掛け作りにつながっている。 - 同（教員）「コンピュータ等の ICT 機器が、授業などで活用されている。」肯定率 97% (−3p) (◎)。 イ - 地元 5 中学の進路担当者、支援教育主担者との情報交換会は 3 回実施できた。(4 回目は 2 月予定) また、茨木市、摂津市、高槻市の中学校の教員にお越しいただき、専門コースの授業公開と研究協議の実施し本校の特色を直接伝えることができた。(○) (2) ア - 学力生活実態調査の上位者 A・B 1 ゾーンの生徒数 24 名。(△) - 進路別満足度アンケートでの肯定的回答 95. 3% (○) イ - 学校教育自己診断（生徒）「家庭学習が習慣となった」肯定率 53% (○) サービスの活用は昨年度よりさらに進んでおり、教員から生徒への課題の指示や生徒から教員への課題の提出する機会も増えている。肯定率は 55%へわずかに届いていないが家庭学習に大きく寄与していると判断する。今後も同サービスの活用をさらに進めて PC を用いた家庭学習を定着させていきたい。 - 同（生徒）「勉強方法が身についた。」71% (+ 2%) (○) 3 年生は講習会、2 年生は課題作成支援、1 年生はオンライン学習支援を実施することで個に応じたサポートを順調に進めることができたと評価する。 ・中堅私大の合格者 5 人。(△) 看護医療系合格者 18 人。(○) ・同（教員）「学校として読書指導に積極的に取り組んでいる。」24% (△) ・同（教員）「この学校は図書室が生徒に活用されている。」38% (△) 図書室の利用者は少ないものの、図書館の昼休みの開館は実施している。蔵書も生徒のニーズに応じて地道に増やすことができています。箱庭スペース、自習スペース、読書スペースなど生徒の利用促進につながるよう図書館内のレイアウトに工夫を凝らした。生徒図書委員会の活動を活発に行い、図書だよりの発行をはじめ積極的に取り組むことができた。

府立北摂つばさ高等学校

	(3)多様な進路ニーズに応えるため専門コースや総合系の授業を充実させる。 ア 高大連携の活用で相互意識の向上 イ 専門コースの内容のランクアップ	(3) ア ・大阪成蹊大学、立命館大学との高大連携等を活用した高大接続に繋がる大学等での学びの先行実施。 イ ・社会文化コミュニケーションコースでのフィールドワークの実施。異校種や地域の連携先と交流活動、防災教育等の実施。 ・美術工芸表現コース国公立、嵯峨美術大学、大阪芸術大学、京都芸術大学等中堅美大の合格にむけ制作と展示運営のスキルを習得する。	(3) ア ・連携授業参加生徒へのアンケートで満足度 85%以上維持。[87.6%] イ ・社会文化コミュニケーションコースのフィールドワークの参加アンケートで満足度 85%以上維持。[91.9%] ・美術工芸表現コースはアンケートにより制作の発表における満足度 90%以上維持。[3年 100%, 2年 85%]	(3) ア ・高大連携の参加者への満足度アンケートで肯定的回答 91.6%。(○) 1年生は、立命館大学と「構造方策プロジェクト」とした連携授業を2回実施。 イ ・社会文化コミュニケーションコースのフィールドワークへの満足度アンケートで肯定的回答 95.7% (○) ・美術工芸表現コースの制作・発表に関する満足度アンケートの肯定的回答 3年 100%、2年 100% (◎)
内組織の業務改善と後継者の育成。 (組織力の強化と改革意識の継続)	(1)チーム学校として機能する体制整備 ア教職員同士の活発なコミュニケーションの機会を設定する。 イ分掌業務の精選 ウ専門コースの充実 (2)人材育成と意識改革 ア 教員の育成 イ 教員の意識改革による「働き方改革」の推進	(1) ア ・大職員室において、全学年での日常的なコミュニケーションを活性化し PDCA サイクルに従って業務を進める。 イ ・分掌業務の精選を行い、行事の工夫改善を図る。 ウ ・全教職員が各コース・系に所属し、後継者を育成することでコース授業の改善とともに継続と定着を図る。 (2) ア ・ミドルリーダーを中心に経験年数の少ない教員の育成にチームとして取り組む。 イ ・学校部活動方針（休養日等）の遵守および全校一斉定時退庁日の遵守を推進する。教員の意識改革を図り、可能なものの外部委託を進め、勤務時間の管理、健康管理の徹底に努める。	(1) ア ・学校教育自己診断（教員）「相談し合える職場の人間関係ができている。」肯定率 80%以上を維持。[85%] イ ・同（教員）「学校行事の工夫改善を行っている。」肯定率 80%維持。[79%] ウ ・各専門コースで教材の共有を図る。 同（教員）「各教科において、教材の精選・工夫を行っている」肯定率 90%以上を維持。[97%] (2) ア ・経験年数の少ない教員への授業見学週間等の設置。[2回/年] ・同（教員）「学校内で他の教員の授業を見学する機会がある」肯定率 90%以上を維持。[91%] ・同（教員）「教員の間で授業方法について検討する機会を積極的に持っている」肯定率 75%以上をめざす。[56%] イ ・時間外勤務(年間 360 時間以上勤務者数)昨年度比 10%以上の縮減をめざす。4月～12月の人数 R5 22人【-12%】(R4 25人)	(1) ア ・学校教育自己診断（教員）「相談し合える職場の人間関係ができている。」85%(±0p) (○) イ ・同（教員）「学校行事の工夫改善を行っている。」67% (-12p) (△) ウ ・同（教員）「各教科において、教材の精選・工夫を行っている」95% (-2p) 1人1台端末の利活用を含め専門コースはもとより教科内での教材の共有により継続性と授業改善が一層図られた。(◎) (2) ア ・授業見学週間等年2回終了。(○) ・同（教員）「学校内で他の教員の授業を見学する機会がある」92% (+1p) (○) ・同（教員）「教員の間で、授業方法について検討する機会を積極的に持っている」81% (+25p) (◎) ICT の活用方法についての情報共有はできており、授業での実践もかなり進んでいる。生徒の学びをさらに深めることのできる授業方法の検証を継続的に行い、授業力向上につなげていくことが重要である。 イ ・時間外勤務の昨年度比 12%縮減。4月～12月の360時間以上勤務者数。R6 15人 (-32%) (◎) 定時一斉退庁日の遵守や平素の言葉かけにより教職員の意識が少しずつ変化しており、適切に退勤時間をコントロールする教職員が増加した。また、退勤時間を意識して業務スケジュールの改善を図る教職員も増えている。